P－10　中性電解水の要介護者の口腔ケアへの応用 ～義歯の除菌効果および口臭抑制効果～

○永松　有紀[1]、永松　浩[2]、村上　繁樹[3]、小園　凱夫[1]
[1]九歯大・生体材料、[2]九歯大・総診、[3]九看福大・口腔保健

優れた殺菌効果を示す電解水を歯科臨床で幅広く使用するために、金属腐食への影響が最少で歯の脱灰作用がほとんどない中性電解水に着目し、印象、診療用小器具、レジン床および根管に対する洗浄・消毒効果を*in vitro*で調べ、高い消毒・殺菌効果を有し、歯科臨床に有用であることを報告してきた。さらに、健常者を対象に、使用中の義歯への中性電解水による除菌・消毒効果を、また、誤飲しても大量摂取でない限り生体への影響がないことから洗口処理も行い、その口臭抑制効果も明らかにした。本研究では、要介護者を対象に、中性電解水での義歯洗浄による除菌・消毒効果、ならびに、洗口による口臭抑制効果を調べて、要介護者の口腔ケアにも有効であることを検証した。

義歯装着の要介護者(84～97歳、介護度：要介護１～４、認知症：無～高度)を対象に中性電解水(NW、pH 7.0、残留塩素38ppm)での処理前後の義歯表面の付着生菌数から除菌率を求め、消毒・殺菌効果を調べた。洗浄のために義歯非装着である間にNWで合計約30秒間洗口を行った。義歯洗浄・洗口処理の前および後(義歯再装着直後)に歯科医師による官能試験で口臭レベルを調べた。本研究は九州歯科大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

全被験者について、NW中での義歯の超音波洗浄２分間処理により検出生菌数は減少した。除菌率が低いケースでは、ブラッシング後に再度NW中での処理を繰り返すことで高い除菌率となり、十分な消毒・殺菌効果を示した。口臭については、洗口後に悪臭と感知される口臭レベルの被験者はおらず、一定の口臭抑制効果が得られることが確認できた。これらより、中性電解水が要介護者の口腔内環境の改善のために有用であることが示唆された。

P－11　九州歯科大学大学院における教育力評価のための教育実態調査

○豊野　孝[1,7]、荒井　秋晴[2,7]、吉野　賢一[3,7]、東　泉[4,7]、片岡　真司[5,7]、自見英治郎[6,7]
[1]九歯大・口腔組織、[2]九歯大・総合教育、[3]九歯大・口腔保健、[4]九歯大・応用薬理、
[5]九歯大・頭頸解析、[6]九歯大・生化学、[7]大学自己評価部会

【目的】本学では、教育成果の向上を目指した大学院教育の改善が進められている。そこで、本研究では大学院生の教育実態の把握を目的として、大学院教育に関する満足度をアンケート調査により調べた。

【方法】大学院生（１年生～４年生)を対象として、無記名のマークシート方式による調査を平成20年度から24年度まで年度毎に行った。主科目、副科目・選択科目、研究指導に対する各満足度、および本学教育の満足度について、高い(５点）～普通(３点）～低い(１点)の５段階評価で行った。これらの各項目に関して、全学年の平均値の経年変化を調べた。

【結果・考察】主科目の満足度(５点満点)の経年変化について、全学年の平均値は平成22年度(3.93)から23年度(3.11)へと減少し、24年度(4.08)に増加した。副科目・選択科目についても、同様な結果が得られた。研究指導に関する満足度は、平成22年度(3.62)から23年度(2.90)へと減少し、24年度(3.49)に増加が認められた。本学教育の満足度については、平成20年度(3.48)から21年度(3.80)へと増加したが、平成22年度(3.71)、23年度(3.31)と減少し、24年度(3.94)には再び増加が認められた。平成19年度より大学院のシラバスが作成され、講義・実習の充実が図られてきた。平成20年度から21年度にかけての本学教育の満足度の増加は、その成果によるものと推測された。

大学院教育に関する上記各項目の満足度は、平成23年度の研究指導の満足度で2.90があるものの、ほぼ3.5～4.0であった。これらの結果より、大学院教育への満足度は年度よって増減があるが、概ね良いことが明らかになった。